



TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

TIEPh



Newsletter No. 08 2009. 7

温暖化対策をめぐる多重論理

茨城大学地球変動適応科学研究機関 (ICAS)

機関長 三村 信男

去る6月10日、麻生首相が日本の温室効果ガス削減の中期目標を発表した。それは、2005年を基準にして2020年の排出量を15%削減するというものである。この目標を京都議定書の1990年基準に読み替えると7%削減になる。この発表に対して、過重な負担を負わせるものという産業界・企業トップからの談話が相次いだ一方、環境団体や途上国からはもっと高い目標をめざすべきと言う批判も出された。さて、私たちは、何に基づいてこの目標の妥当性を判断すればいいのだろうか。

21世紀に入って温暖化の影響と見られる災害が相次いだことや、IPCCの第4次報告書を受けて、ここ3年のG8サミットでは2050年に向けた長期的な削減目標で主要国首脳が合意するという大きな転換があった。すなわち、長期的に温室効果ガスを大幅に削減する必要性については、国際的な一致が生まれている。一方、その排出削減の負担の配分となると、対策の効果とともに負担をできるだけ小さくする経済性、対策の実現可能性、国際的公平性等多くの論点があり、各国の利害が絡み合っただけ簡単には合意に達するとは思えない状況にある。しかも、短期的な視点と中長期的視点とを合わせて考える必要がある。これまで、環境対策は産業活動や経済成長に対立するものと考えられてきた。しかし、オバマ大統領が掲げたグリーン・ニューディールが象徴するように、環境への投資を現下の経済危機からの脱出と長期的な新しい経済成長（低炭素経済）の駆動力にしようという流れが生まれた。

そうであれば、温室効果ガスの削減目標を、現在の経済システムや技術の延長で考えるか、新しい経済システムをめざすかで大きく違ってくることになる。先日発表された中期目標に対して何人かの産業界トップが過重な負担といったのは、現在の経済システムの急速な転換はリスクだという考え方によると思われるし、もっと高い目標をという意見は、地球環境の保護に軸足を置いた新しい産業の育成をめざせと言う意見と考えられる。さらに、この目標が国際舞台に出たときには、先進国としての責任論や公平性論にさらされることになる。私見だが、この目標が国際的に生き残りうるかどうかは難しいと考えている。

こうしてみると、国際的な中期目標が、科学的認識や経済的見通しのみで決まるものではないことは明瞭である。関係する多重論理を整理し、地球益と各国の国益を調整する価値判断に基づいて決まることになる。このような複雑で高度な意志決定には、時代の精神を読む深いものの見方が必要であろう。そこでは、哲学や倫理学、価値判断論などの役割が一層大きくなっていると感じる。



東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）は、自然観探究ユニット・価値意識調査ユニット・環境デザインユニットから構成され、さまざまな研究活動、シンポジウム、研究会を企画・運営しています。今回のニュースレターでは、2009年度の活動報告、及び活動予定を掲載します。詳細につきましては、TIEPhホームページ（<http://tieph.toyo.ac.jp/home.html>）をご参照ください。

第1ユニット 「宗教とエコ・フィロソフィ」 予告

渡辺 章吾

— 日本宗教学会パネル発表参加 —

第1ユニットでは、京都大学で開催される日本宗教学会本年度学術大会において、9月13日（日）、「宗教とエコ・フィロソフィー東洋の宗教伝統を中心として」というパネルを持つ。発表者や発表内容等は、以下を予定している。

宮本久義「ヒンドゥー聖地と環境問題」：ヒンドゥー教聖地の縁起や巡礼作法案内を伝える文献を調べると、信仰環境の発展の様相と同時に、自然環境の保全にも多大な寄与をなしてきたことがわかる。しかし一方、近年になって人為的な環境破壊も問題になっている。今回は聖地バナールスを例として、環境保全のためにどのような対策がなされているのかを考えてみる。

橋本泰元「中世ヒンドゥー教にみる『地上の天界』説と環境倫理」：中世に発展したバクティ（信愛）信仰のうち、とくにクリシュナ信仰諸派では、その生誕地などの聖化が神学上盛んに行われ、＜地上の天界＞として多くの巡礼者を惹きつけてきた。この教説を分析して、環境に対するその考え方を分析してみる。

渡辺章悟「輪廻と環境—インド仏教の自然観再考—」：インド仏教では、環境世界としての自然を器世間と見なし、有情世間に対して考察する。この器世間と有情世間は因果の関係で説明されるが、考察の基本はあくまで有情の観察にある。この有情という考え方と多元論的人間観から、仏教の環境倫理への視点を再考し、現代の環境問題への対応を考える。

竹村牧男「日本仏教とエコ・フィロソフィ」：仏教では、人間と環境を正報と依報として業果と見てきたが、日本仏教ではこの世を浄土と見なす立場が顕著になってくる。この見方は、我々人間に何を提起しているのかを分析し、それはエコ・フィロソフィの構想にどのように貢献しうるか検討する。

野村英登（共生思想研究センター）「天人相関の理論と実践—風水と煉丹術—」：東西の自然観をいうとき、しばしば我々は調和と支配を対置しがちである。しかし中国では、自然を生きていく上での規範としつつ、同時に統制の対象ともしてきた。今回の発表では、そのような自然と環境の問題を、宗教的な実践に焦点を当てて、中国のエコ・フィロソフィの様相を考察する。

なお、これらに対し、共生と環境の問題を現代の思想的課題として研究している朱子学・陽明学の研究者・吉田公平が、批判的にコメントし、これらを踏まえて、フロアと有意義な議論ができることを期待している。

第2ユニット ジュリー・マシューズ氏講演会報告

大島 尚

2009年5月8日、サンシャインコースト大学准教授で教育社会学が専門のジュリー・マシューズ（Julie Matthews）氏による講演会、「サステナビリティの教育について—オーストラリアの現状から—」を開催した。

はじめに、オーストラリアの教育制度についての説明があり、オーストラリアは教育サービスの輸出国で、マシューズ氏自身も国際教育に関わる研究に興味を持っていることが述べられた。続いて、オーストラリアの自然が短期間に破壊されてきており、多くの生物種が絶滅の危機に瀕していることが紹介された。そのような問題に対して、サステナビリティに関する従来の論説は二つの点で不十分であると氏は指摘する。

それは、第一に科学技術が環境問題を引き起こしたにもかかわらず、同じ科学技術の考え方で問題を解決しようとしていること、第二にサステナビリティの論説は人間を中心においており、人間、動物および自然の間の関係性を軽視していることであるという。そして、われわれ自身が何者なのか、われわれはどう考え行動するのか、われわれ自身をどのように教育すればよいのかという問題を理解する必要があるということで、哲学、社会心理学、教育学の領域からの検討がなされた。まず、われわれ自身の理解ということに関しては、ジャック・デリダが西洋哲学の限界を指摘し、環境の中で人間のあり方や環境との関わり方に問題が存在すると主張していることが紹介された。また、社会心理学では態度と行動の相関が低いことが指摘されており、行動を変えるには文脈や社会的規範、習慣などの補助が必要とされるとのことである。さらに、教育学の立場からは、新しいサステナビリティ教育が求められていることが述べられた。氏は近年、大学教育における「エコバーシティ」というアプローチに取り組んでいるという。エコバーシティとは、生態学的な価値観と倫理に基づく全体論的なアプローチで、大学はサステナビリティの観点から統合されたコミュニティでなければならないと結論づけられた。

講演後に、社会心理学や哲学の視点を中心に活発な質疑応答が交わされた。また、オーストラリア大使館のケネス・ホー一次長から、オーストラリアと日本の国際交流教育に関する展望が述べられるなど、今後のサステナビリティ教育を考える上で有意義な講演会となった。

第3ユニット 環境哲学に関するフランスでのインタビュー報告

永井 晋

2009年3月4日から18日にかけて、フランスにおいて4人の哲学者に環境哲学に関するインタビューを行った。

まず、パリ高等社会科学院のオーギュスタン・ベルク氏に、彼が学会で滞在していたリヨンで話を聞いた。ベルク氏は、日本の空間や風景に関心を寄せる地理学者・哲学者として日本でも知られているが、彼のこれまでの考察を凝縮した最近の風景論と、今回の学会での発表に基づいて彼の環境思想のエッセンスを聞くことができた。

次に、パリで会ったファブリス・ミダル氏は、チベット仏教研究・実践とハイデガー研究で知られるユニークな気鋭の若手研究者である。インタビューでは、主にハイデガーの技術思想に基づいた環境論が中心となったが、仏教や、ハイデガーと親交があった日本の哲学者にも話が及び、具体的な環境思想こそ展開されなかったものの、新たな思考のひとつの展望が示された。

ベルク氏の推薦でパリの自宅で会うことができたカトリーヌ・ラレール氏はパリ第1大学教授、現在フランスの環境哲学を主導する立場にある哲学者である。インタビューには氏の夫であり共同研究者である農業技術者のラファエル・ラレール氏も参加し、ハイデガーに淵源するような反科学的な環境思想に対し、アメリカの環境思想をひとつの拠り所として諸科学の成果や農業などの現場での実証的データに基づく具体的な思考の重要性が説かれた。

最後に、ルーアン大学教授であり、現在のフランス現象学を代表する現象学者の一人であるナタリー・ドゥブラズ氏にパリの自宅でインタビューを行った。主にフランシスコ・ヴァレラとの共同研究を通して新たな現象学の地平を切り開いてきた彼女の研究を背景に、フォン・ユクスキュルの動物性やハンス・ヨナスの植物性に関する研究を現象学に導入して、ハイデガーの世界論など従来の現象学の限界を超えて新たな環境の現象学を構想する可能性が語られた。

TIEPh 事務局から

去る5月16日（土）、IR3S 副機構長（国連大学副学長）の武内和彦教授をお招きし、第3ユニットを中心として「環境デザイン」についてのワークショップを行いました。本研究員の河本英夫教授からは、「システム・デザインと環境」というテーマで、様々なシステムが連動する持続的システムとしてのハイパーサイクルの意義について説明がなされました。ハイパーサイクルとは、たとえば社会システムにとって循環型であるものが、同時に人間システムにとってはより価値が高い新たな価値を生み出す、というような二重作動をキーとする概念であり、サステナビリティにおいては、このようなシステムの考案が必要であることが提示されました。

続いて、稲垣諭助教からは「環境デザインについて」というテーマで、具体的な環境デザインの事例をあげながら、新たな環境デザインの可能性とアイデアが議論されました。

武内教授からは都市計画や緑地計画の観点から環境デザインの方向性をめぐって、TIEPh の研究員とともに活発な議論がなされました。これらの議論を踏まえて、今後 TIEPh がサステイナビリティ学に対して新たな定義を与えることが出来るよう、これからも IR3S の活動に積極的に参与して欲しいとのコメントを頂きました。



竹村牧男著 『入門 哲学としての仏教』 紹介



2009 年 4 月、竹村牧男研究員の新刊『入門 哲学としての仏教』（講談社現代新書）が刊行されました。本書は、「存在」、「言語」、「心」、「絶対者」、「時間」など、通常、西洋哲学の領域では形而上学の問題として議論されてきた問題群がすでに仏教思想の中にも見出せる、という著者の長年の問題意識から仏教の哲学的側面に光を与えるものです。

自然環境についての議論は、第四章「自然について—自己と環境の哲学」において詳述されています。環境問題の解決のためには、今後、科学・技術をどのような方向で用いていくのかが鍵となり、そのためには、「たしかに人間観・世界観がなければならない」とし、自己と環境の関係を唯識思想に基づいてわかりやすく解明しています。「哲学は西洋だけにあるのではなく、仏教などの東洋思想にも存在していることを見逃すべきではない」という著者のスタンスから、仏教思想を現代の具体的な諸問題と関連させつつ、誰にでもわかりやすい言葉で解説した画期的な入門書です。ぜひご一読ください。

<2009 年度 TIEPh 活動報告>

4 月～7 月

「全学総合」講義として、「エコ・フィロソフィ入門」を開講

5 月 8 日

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ

2009 年度講演会

「サステナビリティの教育について —オーストラリアの現状から—

講師：ジュリー・マッシュューズ

5 月 16 日

2009 年度 TIEPh 学内ワークショップ

テーマ「環境デザイン」

質問者：武内和彦

<今後の活動予定>

9 月

『「エコ・フィロソフィ」入門—サステナブルな知と行為の創出—』

ノンブル社より刊行予定

9 月 12 日～13 日

第 1 ユニット：日本宗教学会パネル参加

「宗教とエコ・フィロソフィ」

於：京都大学

9 月 19 日

TIEPh 国際シンポジウム

「環境哲学の可能性～環境問題の解決に向けて～」

於：東洋大学 白山キャンパス 6 号館 6309 教室

10 月 10 日

TIEPh/ICAS 共催 国際セミナー

「持続可能な発展と自然・人間 —西洋と東洋の対話から

新しいエコ・フィロソフィを求めて—

於：東洋大学 白山キャンパス スカイホール

11 月 28 日

TIEPh 国際シンポジウム

「日本発のエコ・フィロソフィを求めて」

後援：読売新聞東京本社

於：東洋大学 白山キャンパス 井上円了ホール

2 月

『「エコ・フィロソフィ」研究』Vol.4 刊行予定

『「エコ・フィロソフィ」研究』Vol.4 別冊 刊行予定

今後の活動の詳細は、随時 HP (<http://tieph.toyo.ac.jp/>) でアップします。

ニューズレター第 8 号 平成 21 年 7 月発行

編集 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ (TIEPh)

住所：東京都文京区白山 5 丁目 28-20 6 号館 4F 60458 室

Tel & Fax：03-3945-7534

E-mail：ml.tieph-office@ml.toyonet.toyo.ac.jp

Homepage：<http://tieph.toyo.ac.jp/>